

搾りたて生乳100%からペットフード製造～多角化経営への挑戦 十勝くわばら牧場(士幌町)



十勝くわばら牧場 代表
桑原 寛晃

「十勝くわばら牧場」ホームページより

【組織等の概要】

- 代表：桑原 寛晃
- 経営形態：酪農（家族経営）
 - 従業員数：家族4名、雇用1名
 - 多角化経営の内容
 - ・ 生乳・子牛等販売
 - ・ バイオガスプラント整備（売電収入、副産物活用）
 - ・ 生乳原料のペットフード製造・販売
- 耕地面積：90ha（採草地55ha、デントコーン畑35ha）
ほか畑作農家にデントコーンの作付委託（10ha）
- 飼養頭数（令和6年1月現在）
ホルスタイン種 520頭（うち経産牛270頭）
- URL：<https://www.kuwabara-farm.com/>

◇【取組の経緯と概要】

- ◆ 飼養頭数の増加に伴い家畜ふん尿の処理が課題となった。持続可能な酪農経営を確立するため、バイオガスプラント（以下、「BP」という。）を整備し、平成28年から稼働開始。
FIT制度による売電収入を得るほか、副産物（戻し堆肥、消化液）を飼料生産に活用し、経営コスト低減を図る。
- ◆ コロナ禍など牛乳消費が低迷する中、生乳の新たな利用法としてペットフードに着目し、自社生乳を原料とする商品開発に着手。学術機関の協力を得ることで、長期保存が可能な乳製品「ペット用おやつドライミルクヨーグルト」の商品化を実現し、令和5年3月に販売開始。商品は、通信販売（WEB）、直接販売（ペットショップや同町の道の駅等）のほか、ふるさと納税の返礼品に登録されるなど販売先の多角化についても尽力。

【取組の成果】

- 規模拡大に伴い増加した家畜ふん尿の処理
 - BPを整備し、家畜ふん尿を有効活用
 - ・ 持続可能な酪農経営の実現
 - ・ 売電による副収益の確保、光熱費の削減
 - ・ 副産物（戻し堆肥と消化液）の肥料活用
- 生乳需給が緩和する中での需要拡大
 - 自家産の生乳を原料に六次産業化を実現
 - ・ ペットフードに活路を見出した結果、ペット用おやつを商品化し販売を開始。



【取り組む際に生じた課題と対応方法】

- 酪農をめぐる状況が厳しさを増す中、持続可能な大規模営農とおおらかな家族経営の両立を模索。
- 酪農経営の多角化により局面を打開。
生乳販売を経営の主な柱とし、BP導入による環境改善とコスト削減、新事業への挑戦を通して牧場経営の活力を維持。生乳を原料としたペットフードの製造・販売という新たな収入源を見出す。

【今後の展望】

- 牛の健康を第一に乳質の良い生乳を生産することを経営の本筋に位置づけつつ、発展的な牧場であり続けるため経営の多角化を進める。
- ペット用おやつは手作りで生産しており、製造数量に限りがある。増産に向け、作業の機械化や賞味期限の長期化といった製造方法の見直しを検討したい。